

待降節第3主日「闇の中に輝く光」

創世記1：1-5・ヨハネ1：1-5

(1)
三つの福音書は、それぞれの視点からユリヌマスの出来事を記しています。ユリヌガ、「マルコ福音書」だけは例外です。キリストの公生涯から始めています。

ユリヌマスの出来事を記しているマタイ・ルカ・ヨハネの福音書は、それぞれ異なる視点・角度から光を当てています。あの舞台照明は、「赤」「青」「黄」の光を同時にあてる、純白な光を放ちますが、3つの福音書を合わせ読む時、ユリヌマスの真意が総合的・立体的に分かるという具合になっています。

「マタイ福音書」は、「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」から解き明かし、「インマヌエル」の成就者であるお方の誕生を指し示しています。

「ルカ福音書」は、御子の誕生の次第を一番詳しく、しかも、順序正しく記しております。ダビデの町の、馬小屋の、飼葉桶の中に寝ていた幼子を、救い主の「こゝろ」と証しております。

ところで、今朝、お読みしたのはヨハネ福音書一章1節です。「初めに、じよはがめつた。じよはは神とともにあつた」とありますが、何とも奇想天外なスタートです。そこには御子の誕生の次第や時代的背景など、「マルコム」がとした出来事の説明などはまるで見当りません。ヨハネは単刀直入に、ユリヌマスの出

来事を中心・本質に迫ります。それ「じよは

「初めに、じよはがあつた」とは、可感じはかすむ。「じよはがあつた」の「じよは」は、「ホ・ロ「ヌ」と定冠詞が付いて「めつ」。「WORD OF THE WORDS」・「JUDITH」中の「じよは」と言われはますます分かるません。

主イエスの弟子の一人「ゼベダイの子・ヨハネ」が、ヨハネ福音書の執筆者です。福音書の中で、最も後代のものが「ヨハネ福音書」です。1世紀末とみられています。

ヨハネは、カリライヤ湖畔で、主イエスから「わたしについてきなさい」と呼び止められたから既に60年近くの年月が経っています。今や、ヨハネは、初代教会の重鎮・筆頭長老となりました。

教団の山口教会で説教奉仕が許された時期がありました。伝統も格式もある明治15年に創立した教会です。礼拝堂には、年寄いた礼拝者が目立ちます。特に、前列二番目に、いびい銀のように座っておられる「W.D長老」が目にとまります。不動の姿勢でアドベントの讚美をしています。若い年になるまで礼拝者であり続けてきた礼拝者の姿を畏敬の念をもって拝見していました。

使徒パウロは、「わたしは、イエスの『焼き印』(スティグマタ)を身に帯びているのだ」(カコテヤ6：17)と申しましたが、和田長老の背後に、「キリストの焼き印」を見る思いがしました。三代目のキリスト者と聞いていま

すから、幼いときから、いえ、母の胎内にあるときから、礼拝に身を置いていたのです。日本人の99パーセント・非キリスト教徒であるという中で、年若いでも、なお、もくもくとキリストの御体なる教会に深々と身を沈めておられる姿には、「じつは」言ひ表せない、侵しがたい「聖徒」の姿を見ているようで、頭が下がる思いがしました。

長老ヨハネは、いまや円熟した最晩年を迎えていました。そのヨハネが、万感の思いを込めて、救い主・イエス・キリストとは、如何なるお方ですかと問われれば、「ホ・ロ・ス」と応答したのです。

しかし、「はじめに」とばがあった「は、ヨハネ独自のものとはいえず、教会には、既に「ロ・ス賛歌」があったと言います。ヨハネ独自のものでないとしても、初代教会が総力を挙げて、「イエスこそは、神の子である」「この異教社会に向けて公言するべき、ヨハネは冒頭の」「とば」が示されたのです。

「すねは」「初めに」「とばがあった「は、ギリシヤ、ローマ帝国に対して、イエ、全世界に向けてなされた伝道的メッセージとしての「とば」なりませぬ。

(2)

ヨハネの「じつ」「初めに」「とば」があった。「じつはは神々々々もにであった」「ですが、聖書を読み始めた頃のわた「じつは、謎めいていてサッパ「判の未ださじつじつ。

日本語で翻訳された最初の聖書は、キュッ

ラク宣教師による「キュッラク訳聖書」です。三浦綾子さんの「海嶺」の中でこのいきさつを触れています。1832年、愛知県・知多半島の漁師3人が嵐に遭い、漂流してアメリカ東海岸にたどり着きます。その後、イギリス・アフリカ・インド洋をへて、支那のマラッカに至り、そこでキュッラク宣教師と出会います。その漁師3人が聖書翻訳の手助けをしました。

ヨハネ福音書の1章1節を日本語に置き換える時、かなり苦心があったといえます。3人とも漁師ですから、「ロ・ス」などという高度に観念的言葉を、即座に日本語に当てはめる言葉を思い付くはずありません。キュッラク宣教師は、語学堪能な方でした。20数カ国の言葉に精通していたと言います。その彼が、日本人3人の助けを借りて翻訳したのが、「キュッラク訳聖書」です。時代は江戸末期です。全文カナ文字です。

「ハジメニ、カシロイモノ「コザル。コノカシロイモノ、コクラウトトモニ「コザル。コノカシロイモノハ、コクラクニ「サマ」。

「ロ・ス」は「カシロイモノ「じつは」「神」は「コクラク」とこまじた。適切な訳とはいえません。しかし、時代背景を考慮するならば、じつはいえません。改めて読み直す時、深い感動を覚えます。

- ・ 中国語聖書は、「猶」「道理」「知識」。
- ・ 英語の聖書は、「REASONABLE」。
- ・ ナインの文藝サークルは、「sin」「罪」「カ・

KROFT「業・TAT」を訳した。
 「言葉」・「心」・「業」・「道」・「道理」・「かこ
 じ」の「REASONABLE」——「うご
 ち」様々な意味が含まれているのが「ロ
 ス」なのです。意味を一つだけとれと言われ
 ても、選べ取れません。しかし、どう考えて
 も、「キリストがロスとなられた」と言われ
 て、「わかに分るものではありません。これ
 は、日本人だけの問題ではなく、西欧人も同
 じなのです。

「ベングル」(有名な聖書註解者)のヨハネ
 1章1節の解説には、「ヨハネは、別名『ボア
 ネゲル』(雷の子)というニック・ネームを持
 っていた。その雷の子が、われわれに雷を落
 したのではないか。それが『ロス』です」。
 「カ・コロコロと大音響をたてて鳴り響く
 雷鳴——、それが「ホ・ロス」であるとい
 うのです。……、とすれば、わたしたちの
 頭に、「ホ・ロス」という雷鳴を響かせな
 がら、ロスとして生まれなられたお方に
 目覚めるように促されているのかもしれない。
 ぞ。

(a)
 「うごち」初め「うごち」があった「ですが
 あの創世記1章1節の「はじめに、神は天と
 地を……」との関連を思い浮かべます。
 1節は勿論ですが、3節も「すべてのもは、
 じ」の方によって造られた」「万物はじ」の方
 によって創造された」「……、の3節も、
 「じ」の方によって造られた。せはじ」

方によって造られた」とあります。
 これは、創世記1章1節と余りにも類似して
 います。

救い主の誕生を、マタイ福音書ではアブラ
 ハムからキリストに至る系図に注目しました。
 ルカ福音書では、「皇帝アウグスト。クレニオ
 がシリアの総督であった時」(2:1)と、歴
 史的視点に立ちました。ところが、長老ヨハ
 ネは、あくまでも、創世記1章1節の「はじ
 めに、神は……」との箇所を思い馳せま
 した。すなわち、神の独り子の誕生を、「世の
 基の始め」から見直して、クリスマスの真の
 意味を把握しようとした。

神は天地を創造された時、「光あれ」「大空
 が水の真ただ中であれ」と、次々と命じら
 れ、世界にあるすべてのものを造りになり
 ました。しかも、その全ては、全能者の御口
 から出た「言」——、その「言」
 が、全天全地・天上天下に響きわたり、光・
 大空・海・空を飛び鳥などが次々と生み出さ
 れたのです。なにより、忘れてはならな
 いのは、神が創造の御業をなされた時の動機
 です。その動機は、すべて「愛」からであ
 ります。「神の愛」による創造の御業でありま
 した。

長老ヨハネは、イエス・キリストの誕生を解
 き明かすにあたり、「じ」を起点にしました。
 ある方は、聖書全巻は「神さまの差し出
 たラブ・リーター」と言いますが、わたしたち
 がキリスト者とせられたのは、無理矢理でも、

強制的でもありません。神から差し出された
ラブ・レターである聖書を読み、そこに驚く
べき愛を見いだし、それに感動し、その愛に
応えたのではないのでしょうか。神に口説かれ
たのです。

終戦後、日本に来た多くの宣教師たちは「神
は愛である」と白のペンキで、自動車のボデー
に書きました。それにしても、余りにも短
く、もっと気の利いた言葉はないのかと思わ
れます。しかし、よくよく考えますと、わた
したちが、聖書を読む究極の目的といえは、
神の愛を知ることにあります。日々聖書を読
むのもそのためです。「永遠のなほなき」のう
い「などを知るためではありません。

俗に、「人生砂漠」といいますが、砂漠の底に
は、清水が流れていると言います。実は聖書
全巻の底流を脈脈として流れているのは、神
の愛であります。それが、如何にわたしの深
い愛なのか――、誰もその愛の深さを測り知
ることはできません。それでも、何とか理解
しようとするために「わたしたちの知
る神の愛は、神の愛の一部分に過ぎない。今
は、鏡に映して見るおぼろびに見えてい
る過ぎた愛」①「①」(2009.11.22)
とつづられています。

50の数年も、御言を説き明かす務めを許さ
れましたが、「神は愛である」との意をわた
け深く話すべきだかと思っております。い
まだ、ほとんどの人が「神の愛の広さを
知る」

かに越えたキリストの愛」(エペソ3:18・
19)と言われれば、誰が十分解き明かすこ
とができるものでしょうか。

「神の恵みは、いとたかき。山にもまさり、
高きかな。海にもまさり、深きかな。原にも
まさり、広きかな。」(讃美歌49の2)。

あの詩人石川啄木は、若いとき、大地に腹
這い、大空を見上げて、「雲は天才だ」とい
いました。しかし、いくら天才の誉れ高い彼で
も、大自然から受け取れることは、その程度
のことです。ホカーンと空を見上げていれば、
「神は愛である」などという次に次第に目
覚め、シフシフと迫り来る感動を覚えた、な
ごということは、ありえるはずもないです。

長老ヨハネのいう「ロ」(「言」)を「愛
と読み替えたかたがいます。

「はじめに愛があった」「この愛は神と共にあ
った」。そうです。「はじめから、神は愛な
るお方であった。」「すべからず先にあって、
神は愛であった。」「天地創造の時から、神は
愛であった。」「こゝろも、やみはれに打ち
勝たなかった」「(5)」。如何なるやみも「如
何なる空の空も」「如何に絶望したものであ
る神の愛に打ち勝つてはなかつた」との告白な
り。

さらに、14節は、「肉は人(肉体)とな
った」とあります。なる「は、原語で「エペ
ソ」です。」「神の愛が具体的になった」「成
就した」という意味です。

終

「は」「十字架のことば」となりました。

「魂の琴線に触れる言葉」というものがあ
ります。反対に「単なる音声に過ぎない言葉」
というものもあります。心を動かせない言葉
とは、その人の背後に祈りと愛が欠けている
時ではないかと思われれます。

世の中は言葉が氾濫しています。意味のない
言葉をしゃべりまくるのを楽しんだり、あの手
し指組が氾濫しています。言葉に実体があ
りませんから不信感を深めます。

世の中が信じられない、友や同僚が信じられ
ない、親が信じられないということを経験し
て口にはしますが、その程度の不信感はまだしも
です。終には自分自身が信じられなくなり
ます。その時も、わたしを、下から、永遠の
み腕をもって、支えてくれる言葉が「あ
とヨハネは言います。それが、ここで、ヨハ
ネのいう」「ことば」です。しかし、ことばは
「ことば」でも、その最後は「十字架というた
ち」となりました。

「十字架の言は、滅び行く者には愚かである
が、救いにあずかるわたしには、神の力
である」「(1:18)。「十字架の言」は愚か
の極みとなりました。「愚か」は「神の
愚か」です。

おそろしく、世界中で一番、愚かで大損な生き
方をしたのは、ヘブライ人に生まれたキリス
トはなにかと思われれます。わたしたちは
動いていきます。また、危険な身をたのむので

あえて冒険しようとはいたしません。何より
もわが身が大切なのです。しかし、省みて
ください、そうした生き方から何かすばらし
いものが生まれたでしょうか。

「十字架のことば」は、主イエスの全能力・
全神経・全存在を傾けた「ことば」です。

「きずも、しみもない、子羊のようなキリス
トの尊い血潮」(④ペテロ1:19)の代価を
もって買い取られた「ことば」です。ですか
ら、長老ヨハネは、ヨハネ1章1節の「こ
とば」「ことば」の中のことば「ホ・ロ」に
と定冠詞を付けたのです。

人間は木石ではありません。聖書は、神と向
かい合い、響き合う存在」として人間をお造
りになられました。「ペルソナ」(人格)とは、
「響き合う」という意味です。互いの心が響
き合うために、単なる言葉ではなく、互いに
響き合う「言」が不可欠となります。言葉が
こんなに信用されない時代はありません。今
に国語辞典「ことばは信用できない」とな
ることを心配しています。

しかし、「言」を媒介にしなければ、何も相
手に伝達できません。「神は愛である」「言は、
いかにしたら最も端的に伝達されるかを、ヨ
ハネはよくよく考えました。14節はその具
体的な説明です。「ことばは人となられた」「言
は肉体となって、わたしたちのうちに宿った」
(口語訳)とあります。

ヨハネは、時至る、時満ちる「ロ」が愛肉
した「・」肉体となられた「ロ」(14)とな

られたことを、喜び、主を讚美しました。

2010年、南米チリで、落盤事故で地下700メートルに閉じ込められた炭坑夫たちの出来事がありました。2ヶ月後に、見事全員が助けられました。その中にオマールさんという年配の炭坑夫がいました。彼は毎日、仲間に聖書を読んで聞かせ、希望を捨ててはならないと、互いに励まし合いました。日々の食べ物、地上の穴からパイプを通じて送られていました。それで生きのびることはできましたが、それだけでは、人として生きる気力や希望は生まれてきません。

絶体絶命ともいうなかで、「ザ・ロトバ」といえるもの、「」の中の「」信仰と希望と愛の「」が必要とされます。

この朝、「」の中の「」となられた救い主イエス・キリストを讚美しましょう。

【祈りまわし】

父なる神さま、「」ごは「」そのものとなられたイエス・キリストを感謝します。次週は降誕節礼拝です。喜び待ち望んでいた時です。どうか、周東のぞみキリスト教会のみなが会堂に集まり、心から主の御降誕を讚美することができましますように。主の御名によりて祈りまわし。「」。